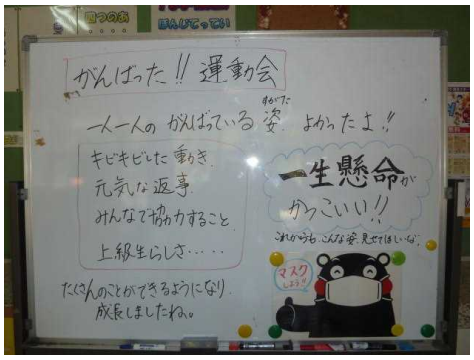
令和２（２０２０）年度　御船町立高木小学校　学校便り

高き志【こころざし】

目指す学校像
地域とともにある
勢いのある学校

No. 23（R2. 10. 28発行）文責 校長 福田雅也

運動会「頑張りました」



素晴らしい好天に恵まれ、本年度の運動会を終えることができました。コロナ禍の中、プログラム数を減らし午前中のみの開催でしたが、子供たちの生き生きとした姿をお届けすることはできたのではないかと思っております。右の写真は、ＨＰでも紹介した教頭先生から頑張った子供たちへの温かいメッセージです。運動会を機会に確実な成長を見せてくれた子供たちの姿を私たち教師はとてもうれしく感じております。

ところで、本号の題名にもある「頑張る」という言葉、保護者の方々はどのように使っておられるでしょうか。また、どのようにお考えでしょうか。

私たち教師は、子どもたちによく「頑張れ！」という言葉を使いますが、私はこの言葉を使うのに抵抗を感じる場面があります。どのような場面かというと第三者的な視点から、この言葉を使う場面です。例えば「地震に負けず頑張って！」というような場面です。私は、このように使った場合、本人にそのような感情がなくても、とてもよそよそしくて、当事者意識がなく、無責任のように感じるのです。ですから、私は子どもたちに「頑張れ！」という言葉を使うときは次のことに注意しています。それは、子どもたちが「何をどうすればよいのか」が分かっている場面で使う。あるいは、そのことを伝えてから使う、ということです。さらに、もう一つ気をつけていることがあります。それは「何を」の部分を一つに絞ることです。また、私が先生方にお願いしている仕事のやり方も一点突破の考え方です。「何を」頑張ればよいかはっきりしていることが一番重要だと考えているのです。そのことで「どう頑張ればよいか」も見えてくると思います。

そして、根が怠け者の私も、どうにかこの考え方でやっています。一点突破全面展開です。その一点が何かといえば、この「学校便り」です。校長ならば、もっと他に大切な仕事があるのではないかと言われそうです。確かにそのとおりだと思います。しかし、私はこの学校便りに自分の思いや願い、思ったこと感じたことを記しています。そこに記したことすべてが、自分の校長としての仕事に何らかの形でつながってくると考えているのです。

と、少し話が逸れてしまいましたが、「運動会での子供たちの頑張り」に話を戻します。私は上に書いた考え方から、練習が始まる時、「何を」頑張ればよいか、低・中・高学年ごとに明確に伝えました。低学年には、６年生や高学年の姿を手本に頑張ること。中学年には、自分のことは自分でできるように、どうすればよいか考えながら頑張ること。高学年にも、言葉ではなく自分の姿で低学年の手本となること。この三つでした。このように、頑張ることを明確に伝えたことが、今回素晴らしい運動会ができた要因の一つにはなったのかなと勝手に思っているところです。

そして、特に大きな成長を感じているのは６年生です。６年生には「一生懸命はかっこいい」という言葉を使って、手本として低学年に見せる姿が「一生懸命」であることを特別にお願いしました。６年生は私のこの期待に見事に応えてくれました。当日の姿をご覧いただいているので保護者の方々にも納得していただけるものと思います。

そんな６年生は、明後日からの修学旅行が控えています。息つく暇もありませんが、笑顔で意欲的に準備を進めている６年生の様子を見ながら、頼もしく感じ、うれしく思っているところです。